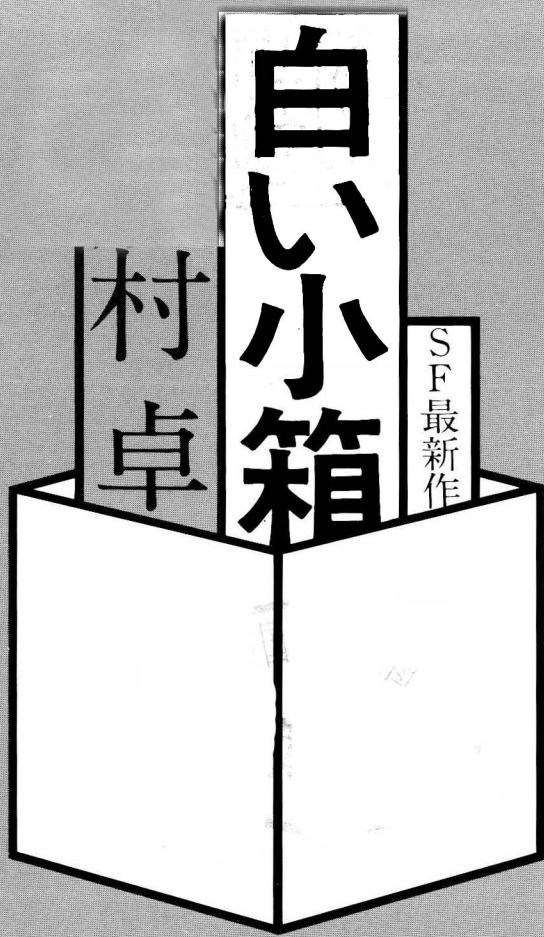


SF 最新作

白い小箱



白く小箱

一九七七年十一月二十五日 初版発行

著者 眉村 卓

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)四三一一

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎中一―六四

梅田第一ビル内

電話 〇六(三一二)一五七三

印刷所 大日本印刷

製本所 共 文 堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© T. Mayumura 0093-363781-3214

目次
走馬燈

執筆許可証 35

自動化都市 57

厄介者 71

出て下さい 89

おお、マイホーム 111

彼をたずねて…… 133

待っていた奴 153

白い小箱 173

遠慮のない町 201

迷路の町 239

装画／矢柳 剛
装幀／サン・プランニング

白
い
小
箱

走
馬
燈

三日間ぶっ続けの、工場での生産会議であった。

本来なら、こうした全社的な大会議は、本社で開かれるべきなのだが……技術畑出身のワンマン社長が、いまだに現場第一主義で、自分も工場の近くに居を構えているものだから、こういうことになるのである。

最終日の、午後六時。

会議は終了した。

出席者たちは、例年の通り、工場のある町の中心部の料亭の宴会に出た。

宴会は、依然として続いている不況と、社長の叱咤激励のせいで、どうももうひとつ盛りあがらなかった。

宴会のあと、社長以下工場に勤務する幹部たちは、おのおのの家に帰り、本社や支社からやって来た面々は、それぞれ宿泊中の旅館に戻った。

本社企画部次長の大西博雄も、そのひとりである。

小さな町なので、表通りを少し行けば、もう旅館なのだ。

あたりはすっかり暗くなっていて、夏の夜のなまあたたかい風の中、軒並みに提燈が吊られている。

遠くから、太鼓の音が聞えて来た。

「そういえば、ここは、今夜からお祭りでしたな」

大西の横を歩いてゐた営業部の次長がいった。

「そうでしたなあ」

大西も頷いた。

「きょうは木曜で、あすは金曜か」

営業部の次長は呟く。「あした、一番の列車で本社に帰って……一日頑張れば休み、か。私はゆっくり骨休みをしますよ。とにかく……今度の会議は……疲れた」

「——全く」

大西がいうと、営業部次長は、こつちを見た。

「私は、すぐに宿に戻って寝ますが……大西さんは、どうしますか？」

「私？」

たずねられたおかげで、大西は、逆に、ふと、ぶらぶら歩いてみようかという気になった。

祭の晩なのだ。

会議も済んだことだし、まだ眠る気にはなれないし……。

それに、大西には、そうしたい理由もあった。

俳句である。

次の土曜日——つまり明後日に、大西の属している俳句結社の、月例会があるのだ。

大西の俳句は、きのうやきょうの、付け焼き刃ではない。学生時代からやっていて、その結社の雑誌の、同人の末席につらなっているのだから、趣味としても相当のものなのである。

その定例会で、しかも、当日は、結社の主宰も出席するということなのだ。何かあたらしい素材をつかんで、いい句を出したかった。

それには、こういう町の祭など、手頃ではあるまいか？

「私は、しばらくそのへんをぶらつくことにしますよ」

大西はいった。

「ほう。俳句ですか？」

大西の趣味を知っている営業部次長は、どちらかという和好意的な口調で応じた。「それじ

や……私はこれで」

「では、のちほど」

ひとりになると、大西は、町のはずれにある神社へと、歩きだした。

毎年の生産会議や、それに出張などで、何度もこの町に泊っているから、神社の位置は知っているが……祭を見物するのは、はじめてだった。

とはいうものの、塀と塀にはさまれた細いまがりくねった道を抜け、石垣の残る坂をのぼって行くうちに、彼は、それが自分がひそかに期待したひなびたお祭りなどでないことを悟っていた。

たしかに、草の匂いはある。樹も多い。が……そうした道に出ている露店は、別にアセチレンガスをともしているわけでもなく、ここだけにしかないようなものを売っているわけでもなかった。早くいえば、彼の住んでいる都会の町なかと大差のない光景なのであった。

いきおい、彼の心は、祭の情緒をたのしむというよりは、彼にとっては日常的な、会社の仕事やきょうの会議の情景を追うことになる。

とりわけ、彼が思い出したのは、このところ、彼と同年配の社員たちの間で話題になっている

——「近頃の若い者」についてであった。

要するに、彼や、彼と同じ位の年の連中には、最近入社して来る若者たちの氣持が、皆目分らないのである。

それも、ただ理解出来ないというだけなら良い。

数年前迄は、入社して来る若者たちは、大西ら年長の社員のいうことは、まるでピンと来ないし、自分たちの考えも年長の人々には分らないのだということを、あからさまに口にした。われわれとあなたがたは別の世界に住んでいるのだという態度を、露骨に示したものだ。

それならそれで、まだ良かった。そっちがそうならこっちもこっちだ——と、そのつもりで対処して来たのである。

しかし。

ここ数年のうちに、だいぶ様子が變つて来たのだ。

あたらしく入って来る連中は、例外なしに素直で、従順であつた。反抗らしい反抗もせず、いわれたことをやるし、受けこたえもそつがない。

大西たちよりも二十歳以上年長の、社長や専務などは、この点に関して、ひどく樂觀的であつた。つまりは世の中が落着いて来て、あるべき姿にたちかへつたので、結構な話だと思つていらしいのである。

大西たちは、そうは考えなかつた。世の中、そんなに簡単ではないはずなのだ。大西たちの印象では、なるほど最近の若い連中はおとなしいが……それが本心からだとは、どうしても思えないのである。腹の底では全然違ふ思考をしながら、そういう風にしていればとにかく年配の人々の機嫌がいいので、それで仮面をかぶって、羊の演技を続けている——という感じがして、仕方

がないのであった。それだけに、相手の心底をどうしても読み取れず、しばしば薄気味悪くさえ思うのである。だいたい、数年前迄の若者でさえ、自分たちの理解を絶した存在であったのに、それより若い連中が、自分たちと通じ合えるわけがないのだ。

いや。

彼は、そんな想念を無理矢理振り払って、おのれの周囲の、祭の風景に注意を戻そうとした。

目の前で、光が揺れていた。

踊りながら、くるくると廻っている。

「廻り燈籠の店なのだ。」

走馬燈といってもいい。

「走馬燈、か」

彼は、声に出した。

走馬燈は、もちろん夏の季語である。

走馬燈……走馬燈……彼は、ぼんやりと眼前の光の乱舞に見とれながら、そこから連想されるものを、無意識に引き出そうとしていた。

と。

「はい。四百五十円ね」

声とともに、そのひとつが、彼に突きつけられたのだ。

「……」

彼は、あっけにとられて、廻り燈籠をさし出している青年を見やった。

「きれいだろ？　これがいいよ。四百五十円」

青年はいう。

ひとり決めに、彼がそれを買うものとしているのだ。

「……………」

大西は苦笑した。そんなに自分が一心にみつめていたのか、と思ったのである。

けれども、あっさりことわって立ち去るには、いささかその廻り燈籠ははなやか過ぎた。こんなものを持って帰れば旅館で笑われるだろうが……祭の気分を味わうのなら、その位の金は惜しくない感じもあった。

彼は五百円札を出して、それを受取った。

「はい有難う！」

青年は威勢良くなった。「五百円ね？　こんなお祭りのときだから、おつりはご祝儀でいただきますよ！　どうも有難う！」

「……………」

大西は、何かいおうとして、やめた。

おつりを勝手に取ってしまうとは、あつかましいと思ったのだが……たかが五十円やそこらのことで、いい争うような真似は出来なかったのだ。

「まだどうぞ！」

青年の声に送られて、彼は、不愉快な気分で、その店を離れた。

歩くうちに、腹立ちは、おさまるところか、ますます強くなって来た。

あんな商売のしかたがあつていいものか？　おつりを強引にとりあげてしまうのなら、なぜはじめから五百円としないのだ。

第一、あの青年には、済まなそうな表情もなかった。お祭りだから、それが当然だといったげだったのだ。

そんな奴に押し切られて……彼は自分の気の弱さをも呪った。

怒りを抑えながら、廻り燈籠をぶらぶらさせて、彼は人ごみの中、神殿に近づいた。

一応、かたち通りにさい錢をほうり込み、拜んでから、きびすを返す。

その彼の腕を、つかんだ者があった。

「大吉だ！」

つかんで、わめいているのは、さっきの廻り燈籠売りと同じ年頃の青年である。「大吉なんだー おじさん、ばんざいをいってよ！ 酒、飲ませてよ！」

見ると、青年の横には、浴衣姿の若い女がいた。

「大吉なんだよ！」

青年は叫ぶのだ。「おみくじ、大吉なんだぜー ぼくら、きっと結婚出来る！ お祝いに、ばんざいをいってよ！ ばんざいでなかったら、ガンザイでも、ザイバンでもいってよ！ それから、酒、おごってくださいよ！」

「ちょっと待ってください」

大西は力まかせに引っ張られてよろめきつつ、たずねた。「ここには……そういう風習があるのか？」

「あってもなくっても、関係ないじゃん。あんた、フワフワ？」

いい返したのは、浴衣の女である。

「フワフワ？」

彼は反問したが、女はもう、つれの青年をつついていた。

「これ、フワフワ！ だめのひらひら！」

青年は、手を離した。

「へー」

と、青年はいい、両手を下から上へ持ちあげて、バーン、と、爆発か何かの格好をしてみせた。

二、三人の若者が、そこへ寄って来た。

「大吉、大吉！」

青年が、手のおみくじを振りまわす。

「わあー」

あとから来た若者たちが、両手を高くさしあげた。

「バンザラ、バンザラー」

ひとりがいうと、みんな、声をそろえ手をあげて、阿波踊のようにてのひらを動かし、どなりだした。

「バンザラー バンザラー」

もはや、大西の存在など、完全に無視している。

「……………」

大西は、黙って、かれらの行動を眺めていた。

何だ？

何だこれは？

こいつら、酔っ払っているのか？

そうに違いない。

でなくて……こんな馬鹿げたことをやるはずはないのだ。

「バンザラー バンザラー」

踊る若者たちをあとにして、彼は急ぎ足で旅館への帰途についた。

2

部長と一緒に昼食をとり、オフィスに帰って来た大西は、部下の若い社員が受話器を手に、こちをみつめているのを認めた。

「あ、大西次長。お電話です」

その社員が叫ぶ。

大西はそちらへ急いだ。

「誰から？」

「岸さんとおっしゃっておられます」

社員は答えた。「個人的な……お友達だとおっしゃっておられます」

「岸？」

岸三郎だろうか？

岸三郎は、大西と同じ俳句結社にいる男である。年齢も近く、雑誌における立場も似ているので、親しくしているのだ。